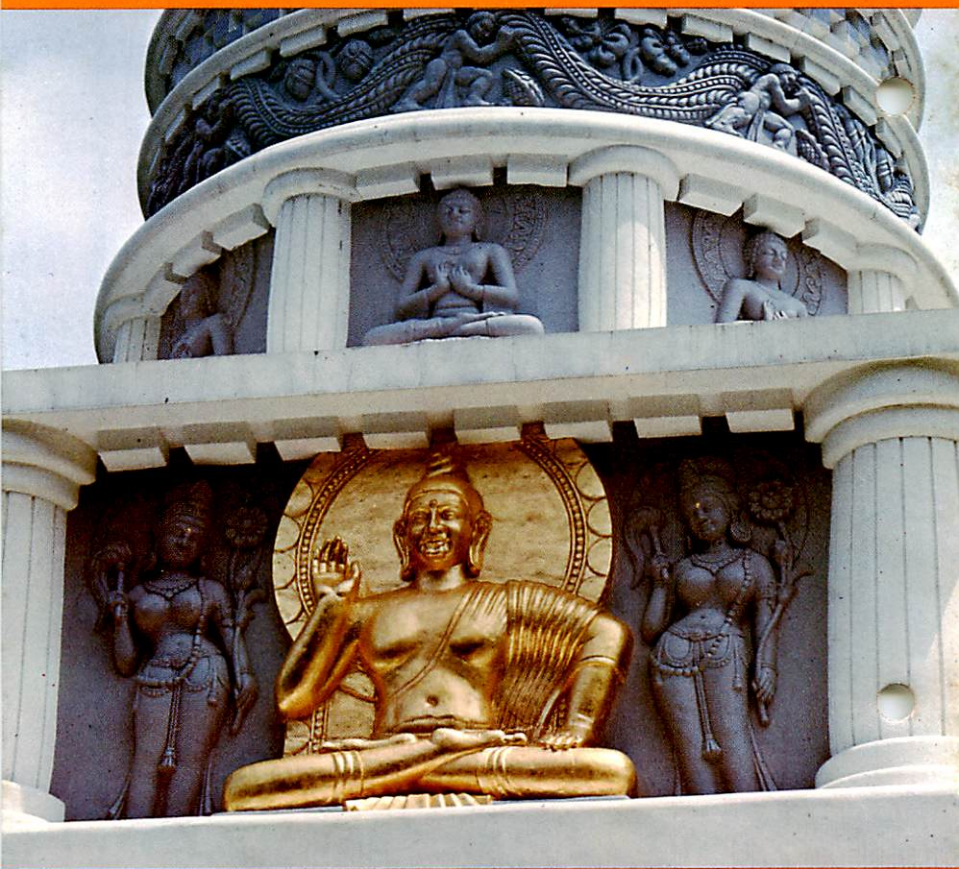


GR
白雲郷

とりわ



28

昭和48年10月1日

宗教法人

鳥居観音

表紙：納経塔の如来像

納経塔完成

納経塔も有縁の皆様方の絶大なる御協力のおかげをもちまして、一年半を以って、この11月1日に 落慶並びに納経式を挙げる運びになりましたことを 謹んで御礼申し上げます。

写経も9月現在、5千数百巻の御協力を頂いております。近頃は筆を持ちつけない方も多く、又御多忙の中をよく御浄写下され この仏縁を無上の喜びとして御協力賜りました事は誠に 感激の至りであります。

この御写経は500巻づつ、檜の立派な箱に納められて永代供養を致しますので 何卒今後共、御祖先の為め又、各自の幸福祈願のために引続き 御写経を勧進申し上げます。

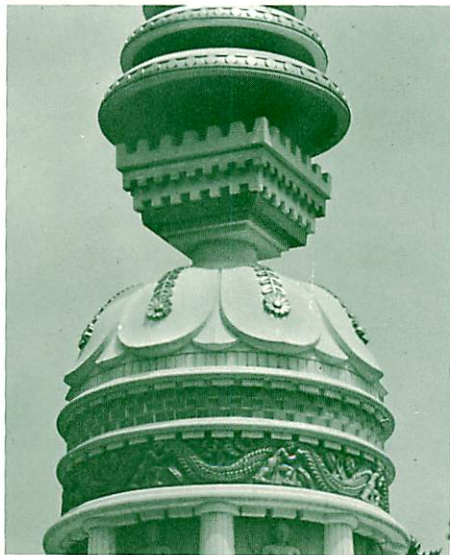
納経塔の形式

この納経塔は純インド、ガンダラ式で 面白岩頂上に建立され大観音とよく調和して 萬縁の中に真白くそびえ 一大美観を呈しています。

表紙写真上部様式

高さ15米

傘の直径2米



とりゐ 第二十八号 10月1日発行

目次

表紙	納経塔外壁如来像	
道光禪師御法話		(其の十一)……………二二
父母の恩		(其の二)……………小林高安…五
インドネシヤの旅		(其の三)……………桐江…八
老万卷写経奉納者芳名(第三集)寄進者芳名		
西遊記		(其の二三)……………十四
田舎医者		(其の七)……………見川鯛山…十八
老万体检音奉納者芳名(第十四集)		……………二十二
鳥居観音だより		……………二十三
裏表紙	鳥居観音案内図と秋の行事のお知らせ	



道光禪師
（故高階瓊仙猊下）
御法話

（其の十一）

二ころのかがみ

「摩訶般若波羅密多心經」

これは普通、略して「般若心經」と呼ばれているお経です。わずかに二百六十二字の仏教のお経です。お経のなかでもっとも短いものですが、その内容にふくまれる意味は、宏大無辺であります。

摩訶も、般若も、波羅密多も梵語の原語を意訳したもので、深くかつ広い意味がありますから、漢文の意味におん訳しても、意味がせまくなったり、あさくなったりしますので、梵語のままに漢字をあてていたのです。それで摩訶は「おう」「大」とやくされていきますが、大のほかに「多」、「勝」などとい

う意味があります。般若は智慧の義ですが、これも単なるふつういうところの智慧ではなく、廣大なる仏智をさして、世間でいう浅いそれと区別するため、梵語のまま用いたのであります。波羅密は直訳しますと「到彼岸」という意味で、凡夫が迷いの岸から悟りの彼岸にわたるといふことです。

このように仏教の真髄ともいふべき、かんじんなところを説いたお経で、そうしてそれは、各人が本来の仏心として持っている心の光明であるから「心經」というのです。このお経は釈迦の説かれた、真理のエッセンスとも申すべき、ありがたい甚深のお経でありまして、右に述べましたように深い広い哲理をふくんでいますから、これをくわしくお話することは容易ではありません。が、以下かんたんに述べてみることにします。

観自在菩薩行深般若波羅密多時。

「観自在菩薩行深般若波羅密多を行じたもう時」と読みます。

観自在菩薩とは、観世音菩薩のことで、その観自在菩薩が、深遠広大な大智慧を行じたもう時という意味です。行ずるとは実現することです。

時照見五蘊皆空 度一切苦厄。

「五蘊皆空なりと照見して、一切の苦厄を度したもう」と読みます。五蘊とは、色、受、想、行、識の五つのことで、人間の身と心をこの五つにまとめたいったのです。この説明は長くなりますから、略しまして、自我と思っているこの五蘊も、よくよく考えてみると真理の絶対面には、一切空であると照見（さとること）せられたのです。實際世の中の苦患というものはみな人間が自我に執着していることからおこることでありますから、これを空であること観念したときには、なんの苦しみもないはずで、ゆえに観世音菩薩はこの五蘊の自我を皆空と照見して、苦厄の根源をたちきって、迷いの岸から、悟りの彼岸にわたらせたまうたということです。

舍利子。色不異空。空不異空。色即是空。空即是色。受想行識亦復如是。

「舍利子よ。色は空に異ならず、空は色に異ならず。色即ち是れ空、空即ち是れ色、受想行識も亦復た是くの如し」と読みます。これは観世音菩薩が「舍利子よ」と呼びかけて、説教を進められたのであります。舍利子とは仏の弟子の名で、もつともすぐれた智慧第一といわれた、舍利尊者のことです。前段の五蘊皆空では、空ということだけ考えて、現実の事相をないように、まちがえる恐れがありますから、空は鏡の自体のように、それが万物の姿を浮かべているように、空とは不離であることを示して「色は空に異ならず、空は色に異ならず」とかさねて説き、それでもなお色と空とを別にみる恐れがありますので、さらに「色即ち是れ空、空即ち是れ色」とかさねて示されたのであります。以上は五蘊の第一の色蘊、これはつまり物質的肉体的（有形）でありますので、わかりやすいのです。次の四つの「受、想、行、識も亦復是の如し」と心の方も色蘊と同じ空相だと申

されたのです。

舍利子。是諸法空相。不生不滅。不淨不增不減。舍利子よ。是の諸法は空相にして生ぜず、滅せず、垢つかず、淨からず、増さず、減らず」と読みます。

ふたたび舍利子よと呼びかけて、この五蘊の諸法は、空なる真理の実相よりあらわれたもので、仮りの事相を超越しているものであるから、その分からいえば、生ずることもなければ、滅することもないであろう、その絶対性を強調されたもので、すなわち宇宙の実相である真理の実体より示されたものです。

是故空中。無色無受想行識。無眼耳鼻舌身意。

無色声香味触法。無眼界。乃至無意識界。

「是の故に空中には色もなく、受、相、行、識もなく、眼、耳、鼻、舌、身、意、もなく、色、声、香、味、触、法もなく、眼界もなく、乃至意識もなし」と読みます。

仏教では、私どもが、我として執着している機関

を五蘊、十二処、十八界とまとめてあって、その仮りの集合した存在の身体と、意識、すなわち精神作用をととも空と説きました。それを人空といえます。

それだけではまだ十八通りのなかの法空の道理が残っております。それで今まで説いた教えだけでは、その人空の理がわかっただけで、法空の理がまだわからないという。それを仏教では、具体化している人間の身体も空であるが、そのほか人間を組織している五蘊も、十八とおりの法もみな空と説くのです。いずれも本来、空と一応否定するのです。すなわち、だれしもが一般に自我と思っているのは、眼、耳、鼻、舌、身、意ですが、これを六根といつてこれも仮りの集合した存在であります。その六根の中の前の五根は、物質的肉体に属する五官のことで、意というのは第六感のことであります。すなわち眼には色を見、耳には声を聞き、鼻には香をかぎ、舌には味を取り、身には触感をとりまします。第六の意は以上のすべての外界に対して、識心の活動をおこすから根といつてあります。

以下次号

父母の恩

(其の二)

小林 高安

行 動

第二条「終に欺誑ごちやうせず」と示されてあります。これは親が子供を育てる上で終始一貫正しく行動して、その子に対して、うそをいったり、だましたりしてはならないことで、理由は明らかです。親としての信頼を失うばかりでなく、その子供が将来うそつきになったり、人をだますことを平気でやるようになるからです。古語にも、「三ツ子の魂百までも」と申して、善悪いずれでも習慣は、第二の天性ともいって身にしみこんで、なかなか直しがたい状態になります。故に親は自ら正直のお手本を示すことが肝要であります。

よく世間で、うそも方便などと勝手な放言をききますが、仏教ではお釈迦さまが、一切衆生に対し真

実を覚さらせる大慈悲心から秘伝の喩えや、実例を挙げて説法をなさったことを随宣方便所説の法と申して、法華経第二方便品の名称ある一品もある通り、あくまでも衆生の状態を広く深く観察しその受け入れる力量に応じて、濟度なさったことでもあります。随って俗にいううそも方便などと身勝手な言動はゆるせないのです。

もし親がそんな態度をとりますと、子供に不信感をいだかせます。それによって親に対して反抗する態度をとるかもしれません。

その果ては子供は不良化し誰のいうことも信じられず、その不幸は個人ばかりでなく社会にまでも、及ぼすことになります。

善因善果、悪因悪果の法則は何人といえども勝手に変更することはできません。それには必ず、真の愛情をもつてうそをいわず、真実一路自ら正直のお手本を示すことが大切であります。

第三条「財をすてて之を与う。」とあります。

これは身分相応の資財をあたえてその子の独立をはかることであります。言葉だけを見ますと、それは金持のできることで、無いものには不可能と思いますが、このことは単に財物だけのことではなくて、子供達の将来独立に必要な知識や技術を身につけさせることも勿論この中に含まれております。

最近の社会の実態を見ますと、財物の与えられている多くの親子関係がありますが、問題はその内容です。

金持大国の親だとばかりに適不適も考えずに金さえ与えればと有名校に無理おしに入学させる例や金儲けを目標に借金をしても学資を貢ぐとか、また持たなくともすむ自動車を買ひ与えるなど、は無駄ばかりでなく、害毒の元となるものがあるのです。

与えられるものが真に子供達の役に立つものは大切なことですが、子供の向上と独立発展に対して、出しおしみをする親もまたあるのです。

子供を育てる仕事は親として当然のことですが、親によって享受した自分の生命を、永遠に生かす途

は、子孫を満足に育てること以外にはないのです。

第四条「為に上族を娉おまわす。」とあります。

これは適當年令になった子女に対しては、それぞれに相当する配偶者を見出して、家庭生活に入らしめよとの教えであります。

最近の国内事情は大きく変わっておりますが、古い時代は何処の国でも親が探するのが普通とされてきました。ですから本人はもとより、良い配偶者を得てよい子孫を願うは当り前です。良縁によって一家の和合と繁栄をもたらすことになります。

近年の傾向として自分で選ぶことは結構ですが、主観だけでなく、客観的にもよく考えた上で、決定し、選んだ以上は相互の立場を理解、尊重して、責任と義務を負うことが最も必要であります。

それがないと、人間性を失い、ついには畜生にもおとる行動がでて来ます。人という文字は、お互に与え合う意味を表しております。人と人との結合として、重要な問題として充分心すべきであります。

第五条「教うるに世事を以てす」とあります。

これは教育を行って、その子の徳性を助長し啓発して、世のため人のために役立つように育てよとの教示であります。

三条においても本人の器量に随って、教育を享ける財を与えることは大切であると申しましたが、ここではその教育効果として、徳性を發揮して社会人類のためになる人に育てるということが、本講のしめくりであります。これをあやまると、世の中に害を与える人非人ともなります。

世間には最高の学校に学び、良い成績で卒業して頭職について、人にも羨まれる立場にありながら、自分の立場を忘れて、間違いを起して刑罰をうける結果におちるといった例は数多くあります。これを見ましても、教育とは物知りになることではなくて人としての自覚によって、自ら立場を忘れず、そこから責務に対して、自信を持って世に処して行ける人こそ真に、人らしい人といえる覚者であります。

以上で、一応親が子を育てる上の心得として、五

項目を申し述べましたが、父母の行いや、つとめ、又守るべきことからは数々の經典に示されておりますが、これらはその子の養育によって家門の隆昌をはかり、人としての大道を全うさせる大本を示されて、この教えは仏、菩薩の行願である父母の道は、直ちに大慈大悲の仏心、慈悲心のすべてなのであります。

俗に「焼野の雉子、夜の鶴、わが子思わぬ親はない。」と、親心はそのまま、み仏のお心、慈悲心であります。

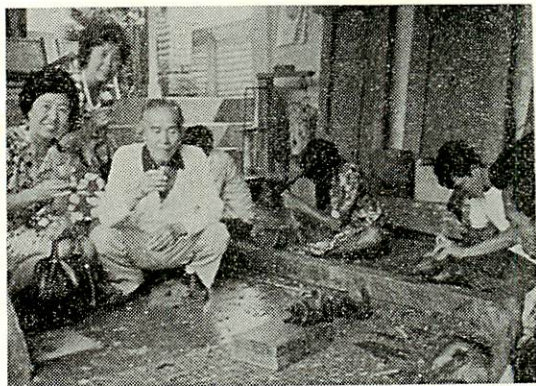
とかく盲目愛となり、溺愛の親心になりがちになるので、仏はいくつかの箇条によって、親心のあやまらぬようにとの慈悲心からご教示になったのであります。

最後に「子を持って知る親の恩」という諺や、「孝行をしたい時には親はなし。」という言葉は誰もが、経験をすることでありまして、早くそのことに気がついて、自らもその人の価値を高めることによって、子孫もまた親を鏡とするのであります。(以下次号)



バリ島彫刻

バリ島の彫刻工場を三ヶ所ばかり見学しました。独特の技術による芸術味ゆたかなもので、すべの数(かず)は少ないが実に器用で細かい透し彫りなど私しまねが出来ません。美味し



彫刻工場

インドネシアの旅

(其の三)

桐江

い果実酒を戴

き乍ら技法に

見とれました

信仰厚いガ

ルーダの彫刻

は其時買った

内の一ツで鳥

居文庫に納め

てあります。

画廊では、

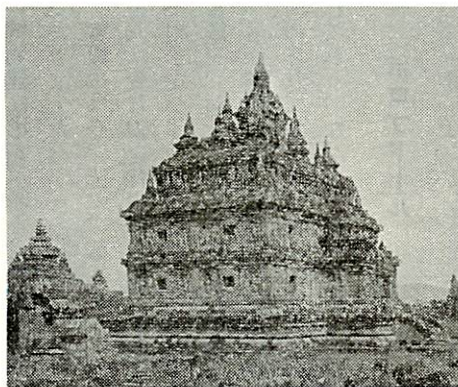
バリ島独特の面白い画で買えとすすめられました
が、価値がわからないので、買う気になりませんでした。

ジヨクジャカルタ



ガルーダ神像

七月十九日、名残り惜しいバリ島に別れて飛行機でジャバ島の中央にある日本の奈良を思わせる古都、ジョクジャカルタに、午後二時着、直ちにヒンズー教の寺院、ロロジョングラン、を見学しました。寺院の中央には、五米位の、シバの神の石像があり、四面の壁彫も見事で且つ雄大でインドのヒンズー寺院にも見おとりがいたしません。



ロロジョングラン寺（ヒンズー教）

この近くで、カラサンプルンパナンドウルド、とか、サリー僧房等の仏教寺院を参拝しました。カ

ラサン寺は中が真暗で、コーモリのいやなにおいが鼻をつきます。

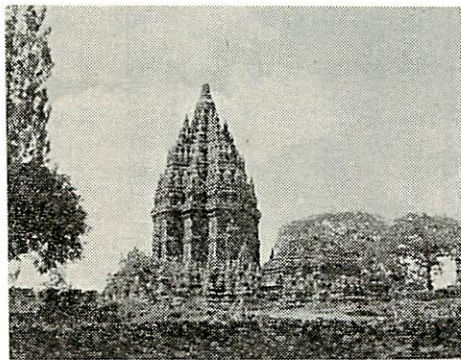
ムンドウ寺の如来像は五米もあり実に見事なものです

之等寺院は非常に破壊されて居って周

囲に、うづ高く散乱しているのも、千数百年の歴史の変遷を物語っております。

其の夜バレスホテルに泊ったが、日本人団体に占領されて、私の娘二人は庭のバンガローに宿泊しました。

七月二十日、ジョクジャカルタの市内見物をしました。



カラサン仏教寺院

博物館は彫刻が多く、歴史がよくわかるので興味がありません。

宮殿には今、第一、第二夫人がおられるとの事、番人は変な刀を背中にさしておりまして私が暑いので帽子をかぶったらどなられて脱帽させられ、昔の宮殿を、おそろおそろ拝観して居る様でした。

暑い国なので、この宮殿の広い庭には小砂が敷きつめられて水がその上に浅く漉えられゆるやかに流れており、なかなか贅沢に出来ております。

ポロブドール

一時間も山に登ると憧れの、ポロブドール大遺跡に着きました。之は日本の奈良朝時代に建築されたものです。大乘仏教は、日本と、インドネシアだけとの事で私は生きているうちに一度見度いと念願が達せられたので感激の極みです。

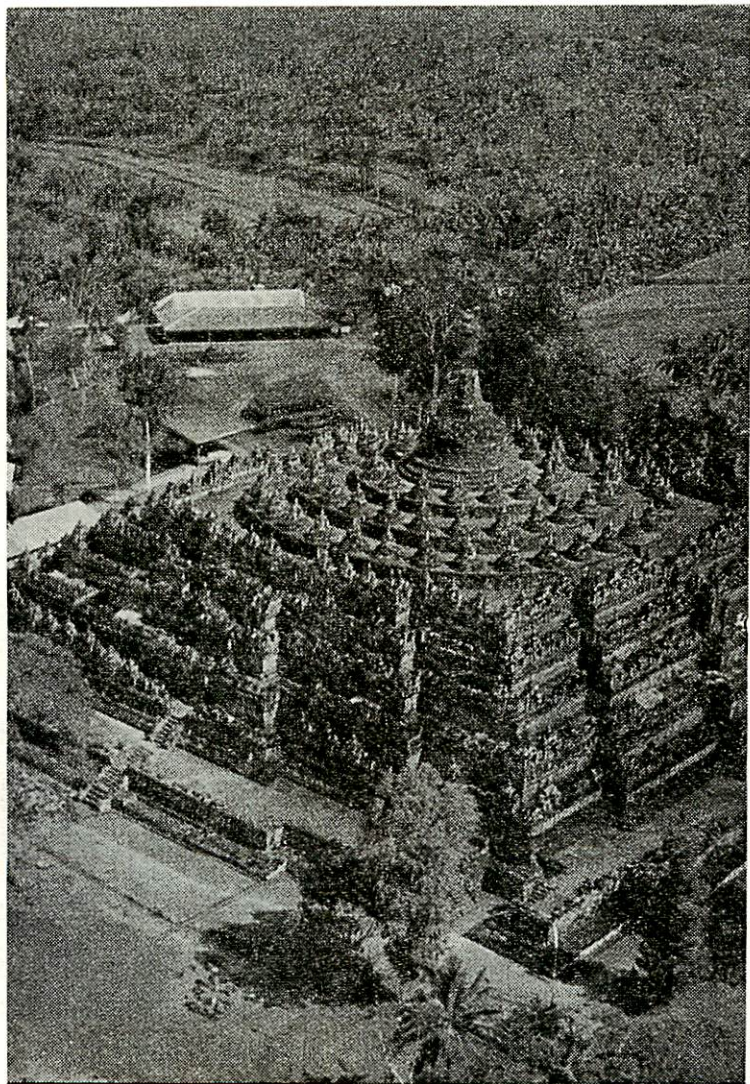
ポロブドールは二百年間殷盛を極めたものですが回教に破壊せられて仏教は滅亡しましたが、庶民的なヒンズー教の根強さに、現在では回教も一部の島

に残っているだけだと言われております。

其他、火山等の原因で、一千年の間、ジャングルに覆われて眠りつづけていたものを、ヨーロッパの植民地の時(凡そ二百年前)イギリス人に発見され、今では規模に於ても彫刻美に於ても、アンコールワットよりも名高くなり、日本からの参拝団があとをたたない程有名になって来ました。

このポロブドールは、三千米のメラビー火山や其他の高峰が周囲をかこんでいる高原で、景色のよい所であります。

其の構造は、四角型で、直経百二十米、高さ四十五米あり、そして一階より四階迄と裏のかくれ壁面には、あらゆる仏典を描画した彫刻が、百六十面もあり、延五キロにも及び、ジャバ式の芸術性ゆたかなすばらしい彫刻であります。それはアンコールワットの猿王や戦争の単純な壁彫にくらべると、実に変化に富んでいて比較になりません。そして五階より八階迄の三段は円型で壁面に彫刻は全くないのは、天上界の極楽浄土を表現したもので、其の上方



ボロブドールの全景

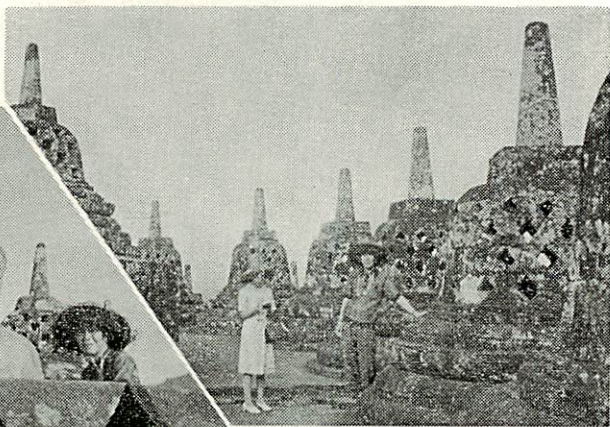
中心はバゴダの形の卒塔婆があったようですが、今は一部が残っているだけです。そして其基段には、目透し格子の石積の鐘形のソトーバの中に、人間大の見事な如来像があり、この鐘形のもものが五百余基も並んでおつて、ポロブドールを、最も印象的なものにしていきます。

階段の各所には、竜や、カーラ、マカラ等の奇獣が並んでいるのも、今流行のゴジラ等の怪獣の元祖だとうなづけます。全体が卒塔婆の形で、火山岩を川を利用して運搬し積み上げたものとの事ですが、彫刻、設計者の手腕には全く敬服しました。

数百の階段を登ると周囲の景色も亦、雄大で、建設に要した土砂を取った為め、昔は四方が湖水でとりかこんであったとの事であります。

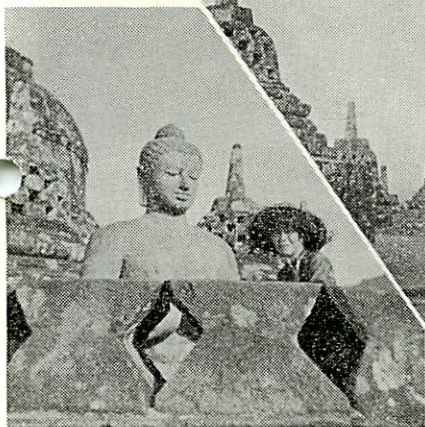
このポロブドールの四方には、前に記したカラサン、プランバナン寺や、サリー僧房等、沢山の寺院があった事を考えると其の規模は実に雄大だったでしょう。

大乘仏教が、東の日本と、南のインドネシアに時



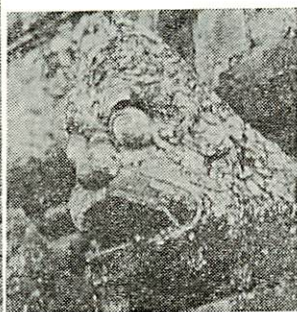
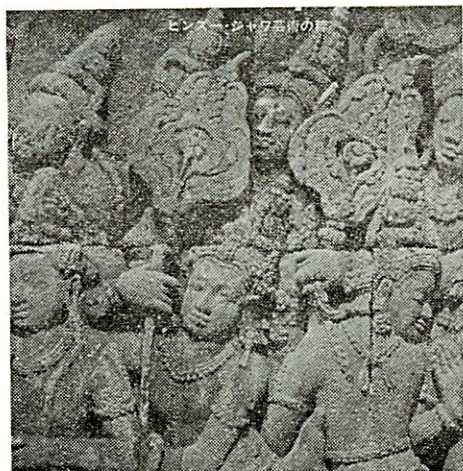
透しぼりの鐘形ソトーバ↑

←ソトーバ内の如来像



北山とり	今井豊子	穴戸安恵	平野明子	北沢久美恵	鈴木辰三	伊藤柳湖	本村その	鈴木マサ	榎本とみ子	佐々香代子	滝田恵子	滝田トキ	廣瀬秀雄	岡田愛子	〃恵美子	下世古美和	〃三雄	松本信子	杉野得太郎	浅見倫一郎	四條美智子	堀沢幸正	小林高安		
枝久保よし	大館菊之助	永沢敏男	浅見倭明	浅見敏子	間瀬良平	田村英治	石井泰三	岩井時子	作田晴代	菴谷かよ	滝田恭子	清水末勝	霜田ふみ子	伊與田喜一	坂巻兼一	青山政夫	宮代光葉	神田勝義	森才一	森繁子	山下藤枝	杉山栄一	杉山トミ子		
1	2	2	1	3	1	1	1	1	3	1	1	1	1	3	2	3	2	2	3	1	1	2	1	1	
杉山フジエ	望月久美子	八木豊	井上憲市	〃順子	高木昭夫	渡辺節子	杉山保彦	〃静子	森敏子	望月睦美	宮原正子	中村幸子	藤岡美智子	滝戸孝太郎	望月安津子	市川貞雄	田中和衣	平沢政雄	畑捨雄	〃きのえ	前田扶み	上出源治郎	市川忠義	伊藤正雄	
1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	1	1	1	1	2	1	1	1	1
伊藤八重子	村田あつみ	枝久保よし	若林とく	〃澄子	漆原武輔	服部みさ	杉浦かど	岩崎美紗子	岩崎有紀子	深沢英子	杉戸兼松	山崎良夫	佐久間綾子	田中とき	北山とり	中島政子	伏見康夫	小田なを	葛山あき	架間すい	仁平ちよ	問宮英一	鈴木堅之		
1	1	11	17	2	4	1	1	1	1	1	2	3	2	2	2	2	2	2	2	5	1	2	4	4	
大森譲子	田村賢市	大森譲子	田村千代子	溝口一夫	佐久間真治	熊倉ミツ子	井染田香子	神谷久子	吉田いね	波多野政雄	小林頼四	岡部禎男	〃光佑	〃美瑛子	〃美瑛子	森田撰子	河原田知子	岡部とく	岡田忠夫	山口柳三	〃憲夫	小林君	中村アサ		
2	2	4	2	2	16	4	2	2	2	2	4	2	2	1	1	2	2	2	1	1	1	1	2	2	

篠	橋	西島	丹羽	富岡	城戸	北村	越中	藤原	藤原	〃	小石	有岡	内藤	安藤	池沢	水島	藤田	小川	柚原	〃	山本	谷口
秀雄	喜作	寛	喜美子	猛	涉	岬	庄司	富子	真司	佳子	英太郎	幹雄	政太郎	道子	三郎	正之	恵子	百合子	妙子	ユミ	昇	八重
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1
〃	熊田	滝田	平沼	林	石浦	吉川	〃	鬼	鬼	荒木	渡辺	佐藤	〃	高山	西塚	大泉	並木	梅沢	〃	高山	〃	篠
カツ子	直藏	トキ	(名栗受付)	俊一	金治	久美子	れい子	恒子	宗久	テル	綱雄	称	いね	忠治	佳実	みつ子	政蔵	トミ	加代子	佳也	恵津子	治子
1	1	1	38	1	3	1	3	2	1	1	5	5	5	5	1	1	1	1	1	2	1	1
〃	深野	知念	斉藤	笠原	権田	福島	〃	〃	〃	吉沢	吉沢	〃	大沢	武内	江森	能見	小野田	湯浅	広瀬	吉川	山田	岡部
まさ子	文吉	敏義	朝治	嘉幸	林太郎	銀三	八重子	フミ	兼秋	栄一	辰太郎	福治	博	祐清	隆義	信美	伝吉	みわ	秀雄	マツ	儀一	君子
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	1	1	1	1
菊田	〃	〃	〃	丸谷	〃	横沢	熊谷	東條	杵島	〃	平沼	タカ	小林	佐藤	神村	中村	阿部	飯塚	燕塚	茂木	〃	ラト
さだ	洋子	公一	敏子	好明	泰代	宣行	美沙子	恵理子	純子	敏子	杉之助	カ	敏男	敏	五郎	儀寛	一成	正夫	彦雄	落喜	社員	同
1	1	1	2	3	1	1	2	2	1	20	30	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
渡辺	丸谷	〃	飯島	増田	〃	千波	土屋	高見	小島	〃	千賀	〃	脇田	〃	増田	〃	篠崎	畑中	〃	〃	〃	宇野
淳夫	重理	淑子	清孝	満之	あい	四郎吉	里江	美保子	市太郎	一子	直	はる	直之助	文代	保	千鶴	文治	恵子	雅子	恵子	隆幸	頼和
1	2	1	1	2	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
累計	第三集計																					
五、二二三	一、一七四					工藤須恵子	工藤忠昭	小川文雄	松本須美子	〃尚子	津村幸代	岡部錦子	平沼とみ	平沼弥太郎	国府方金佳	〃カツエ	田村佳季	黒川健亮	北田寿美子	榎本綾子	神山きみ	軍司幸
						1	1	60	2	2	2	10	20	100	103	1	1	1	1	1	1	1



怪獣カーラの彫刻

壁彫の一部

も同じくして開花したのも奇しき因縁というべきでありましょう。併しインドネシアの大乗仏教は、僅か二百余年で亡び、此の世界的大遺跡も、一千余年の間、ジャングルの中にねむりつづけて何等記録もなく現在仏僧も全く姿を見る事が出来ないあわれな有様を巡拝してつくづく感じた事は、日本民族が、二千六百余年もの間皇統連綿として大乘仏教と共に栄えて来た事は誠に有難い極みで感激の外ありません。

ポロブドールは小山の上に建てられているので漸時崩れつつあり之を修復するには、莫大の費用と年月を必要とするので、世界的問題となっております。

ポロブドールを見学するには少くとも、二三日を要すると言われるのに、僅か半日では、大極的な観察しか出来ないのです、残念でしたが、永年の念願が達せられた私老夫妻にとっては、観音様のおみちびきであると、しみじみ仏恩に感謝しております。

夜、ジャバ名物の影絵芝居を見物しました。皮を克明に切抜いた沢山のあやつり人形の影絵芝居は、あまりにも単純で興味ありませんでした。 合掌



西遊記

(其の二三)

岡部千三

宝蔵国をあとに

と法師は、あわててひきとめるのだった。

「わたしは、あなたから破門された身ですから、おともはかないません。おししょうさま、そうでしょう。」と、悟空は、ほうをふくらませていやみを云うのだった。

「いじわるを云うものではない。わたしがわるかったよ。破門はここでいまとりけしにする。やっぱりおまえがいなくては、心細いのでなァ。いっしょにいってくれ。」

法師は、たのむようにいいふくめた。悟空はそのことばをきいて、くすりとわらって、

「おししょうさまがそうおっしゃるなら、よろこんでおともをこの悟空いたします。でもこれからは、

あのじゅもんをとなえるのはごめんですぜ、あれをされると、あたまがわれるようにいたくて……。」と、顔をしかめ、手をあたまにもっていった。

宝象国の国王は、むすめの百花しゅう姫がもどつたよるこびに、宮殿でさかんなお祝いの会を開いてのめやうたえの大きわざをした。なかでも、くいしんぼうの八戒は、腹の皮がやぶれるかと思うほどたべたうえ、ぐうぐうねむってしまった。

夜があけると、旅にはもってこいの晴れたよい日となった。

「おいおい、八戒、そういつまでもねむってるでない。悟浄もおきな。おししょうさまはおでかけだぞ。」と悟空は、八戒と悟浄をゆりおこし、法師のあとにつづいた。姫は門の外で、見送っていた。

金かくと銀かく

雪がとけ、川の氷がわれると、木に小鳥たちがな
いて、春がやってきた。

三蔵法師と三人のでしたが、平頂山という山に通
りかかったときである。

「おおい、おおい。」と、山ではたらいっていた木
こりが、あとをおいかけてきた。

「あなたがたは、天些へ、経文をとりに行かれる
方ではありませんか。」

「その通りです。なにかご用でも？」と法師は、
しずかにこたえた。

「あつ、やっぱりそうでしたか。それは大へんだ、
じつは、この山に、あなたがたをまぢかまえている
わるものがあります。それは、金かくと、銀かくとい
う、きょうだいの怪物です。あなたがたをつかまえ
て、たべようといっています。」

「ぶるるる。たべられてたまるものか。で、そい
つは、どこにすんでいるのだ。」と悟空がきくと、

「れんげ洞というほら穴です。なにしろつよいや
つで、おまけに五つの宝ものをもっています。その
宝ものが、どれもこれも、たたかひのやくにたつも
のだそうですから、よくよく用心されることがよい
と思います。」といったかと思うと、きこりのすが
たは、ふっとぎえてしまった。

びっくりしたのは、八戒と悟浄である。

「きょうだい、きこりは、どこへいったのだろう」。
「天上へ、もどられたのさ。」悟空は、空の方をゆ
びさしていた。

「きこりのすがたははしていても、きこりではない
のだよ、神さまで、おししょうさまをおまもりくだ
さるために、わざわざ、おしえにこられたのだ。こ
れはしっかりしないと、とんだめにあわされるぞ、
八戒、おまえ、金かくと銀かくのようすを、よくさ
ぐってきてはくれないか。」

「いいとも、では、いつてくる。」

八戒は、まぐわをかつぐなりかけていった。

あとで、悟空は考えた。いつも八戒はのんきな性

格だから、またたべることに氣をとられて、ことによると、怪物のようすなどわすれて遊んでいるかもしれないと………思った。

「おししょうさま、八戒だけではあんしんできません。わたしもいって、見てきます。」と云って、

悟空は、あぶになつて

八戒のあとを追いかけて

いって、耳

にとまった

が、八戒は氣

がつかない。

もう歩くのが

いやになつ

て、道ばたに

すわりこんで

しまった。

「氣候もよく

てていい氣持

だここらでち



よつとひとねむりしよう。ここなら、おししょうさまも、悟空のきょうだいの、見てはいないだろう。どっこいしょ。」

「やっぱりこれだ。こまったやつだ。」

悟空は、こんどは、木つつきと云う鳥になって、とがたくちばしで、八戒の顔をつつきまわした。

「うへっ。いたいじゃないか。」

八戒は、びっくりして、とびおきた。

「なあんだ、木つつきだったのか。おれは木ではないから、いくらついても、虫なんかはでないぞ。あっちへいけ。」と手で、木つつきをおいはらい、また、ぶらぶら歩きだした。

悟空は、わらいたいのをがまんして、またあぶになつて、八戒の耳にたかっていた。

二〇キロもいくと、八戒の足は、また止まった。

「もうだめだ。れんげ洞といつても、このひろい山の中では、どこにあるのかわかるものではない。いいかげんでかえることにしよう。だがまてよ。もどるのはいいが、きかれたらどうしよう。」



田舎医者（其の八）

見川 鯛山

挿絵 おおば比呂司

さみだれ

「龍がか？へえ……。だが、あんたは、あの男と仲が悪いんじァなかったのか？」

「そりァそうだわな。本当はあんな野郎、くたばっちまったほうがいいのだが」

「そんなら放つとけばいいじゃないか」

「ばかやる。人が死にかかっているちゆうに、ほつたらかしておけっか！あのままじァほんとうに死んじまうぞ」

「そんなにひどいのか」

「ンだ、おれ、さつき通りがけにそつと隙間から

覗いてみたんだ」

「まるでアキ巢みたいだな」

「だまって聞け！そうすつとおめえ、野郎の小屋

ん中は真つ暗で、餓鬼ン畜生が泣いてやがった。だから俺、へんてこだと思つて、中き入つてみたんだ。そしたらな、たまげたじァねえか、龍の野郎、ベトベト血吐いて、土間さぶつ倒れてけっかかりやがるだ」

「血を吐いてたァ？かなり吐いてたのか」

「ああ、いっぺえだつたみてえだ。俺、声かけても野郎返事も出来ねえで、おっかねえツラして俺こと睨んでやがった」

「そうか……可哀そうに……」

「あの野郎、声も出せねえだゾ。死ぬのかな本当に」

「そんなに苦しそうか？」

「ひどいな。だから俺、汚えけど蒲団しいてそこ
さ寝かしてきただ」

「おお、そりゃよかった」

「なあにあゝだ共産党、どうなっちまったってか
まやしねェだが……。でも早えほうがいいな、すぐ
行ってんべ」

と、彼はもう足ぶみをしている。やっぱり心配で
しかたがないのだ。

「よし、すぐ行ってみよう。でも……あんたは、
もう来ないでいい」

「な、なんしてだ？俺が見つけてやったんだゾ！！
「あんたは、龍に嫌われてるよ」

私が云うと、定年に近い茶晶巡査が、淋しそうに
顔をゆがめ、力なく云った。

「その方が、いいのか？」

「そうだと、興奮させると悪い」

「そうかなやっぱり。でも持ち直すべかな、あい
っ」

「さァ、どうかな。とにかく行ってみる」

「頼むよな、なんとかかな」

往診靴を持って玄関へ廻ると、駐在がもう先廻り
して私のゴム長をそろえていた。

診療所の庭でまだ雨にぬれながら立ったままいる
駐在を残して、私は開拓の龍の小屋へ向かった。

児玉龍は終戦後間もなく、老いた母と病身の兄と
いっしょに満州を引き揚げ、この高原へ入植してき
た。

兵隊服を着た二十二才の龍のたくましい筋肉は、
太い木をきり倒し、岩石の火山灰地を掘りおこし
て、那須原野の一面を少しずつ少しずつ広げていつ
た。弱い二人の肉身を背負いながらも、龍の分厚い
胸は希望にあふれ、その陽焼けた童顔は白い歯を
みせて、いつも笑っていた。

そのころ、龍はよく私の家へ遊びにきていた。真
夏のはげしい一日の労働が終ると、彼はドラム缶の
風呂へはいり、白いシャツに着替え、シャボンの匂
いをさせながら出かけて来た。

あるとき、龍は私にドイツ語を教えろとせがんだ。

彼は近くの友人達を誘い、私たちは勉強をはじめた。先生も粗末だったが、私の弟子たちも決してよい出来ばえではなかった。

(原語省略)

と、同じページを、私たちは毎晩のように行ったり来たりして、少しも先へは進めないでいた。

新緑の森では夜のカッコウが鳴いた。

夏の夜は、遠い盆踊りの太鼓を聞いた。

秋の夜なごは、栗を焼いて食べた。

吹雪の夜は炉端の薪がバチバチはねて、真っ赤な焰が、弟子たちの頬を明るくしそめた。

私たちの楽しい集いは、そうして一年間つづいた。

そのころ、龍の年老いた母があっけなく死に、そして彼の兄が嫁をとった。肥った顔の女だった。

翌日から、龍の仕事は急にはかどっていった。彼がぎりくずす石ころや木の根を、兄嫁がモッコに積みかさね、二人でになって小堀へ捨てる時、龍の畑は目に見えてその広さを増していった。そして、汗に光った逞しい龍の体を、兄嫁が冷たい流れでタオ

ルを濡して拭いた。

しばらくの間この狭い龍の小屋の中で、若い三人の楽しい夜の団らんがあった。だが、ギラギラ光る高原の真昼の畑では、いつしか、龍と兄嫁の二人だけの、逞しく荒々しい愛情が芽ばえていった。そのころ、兄の病勢が進んでいた。女の激しい肉体が、胸を病む汗ばんだ男の体を蝕ませていったのだ。

そして、秋のある寒い朝、兄が死んだ。軽い棺が母の墓にならべて埋められると、その夜から女は龍と夫婦になった。

そしてそれつきり、龍は私の家人遊びにこなくなつた。

間もなく、女が、兄の子を生んだ。胸を病んだ男の花火のように燃えつくしたこの世への遺産であった。

火山灰地の龍の畑では、僅かばかりの芋と唐モロコシだけがとれた。その芋を食いながら、龍はがむしやらに、石ころと篠笹の高原を掘りつづけていった。やがて、吹雪が渦を巻いて那須高原を窒息させる

と、龍は道路工夫となつて日銭を稼ぎ、夫婦はわずかな麦を買つて食べた。

うち続く貧乏は、やがて龍を疲れさせ、無口で偏屈な男に変えていった。目がくぼみ、かん骨がとび出しそうして龍の健康が、くずれ始めた。

私は、仲間たちと一緒に龍が共産党へはいった噂をそのころ聞いた。

すると、駐在の茶島巡査が龍の小屋を嗅き廻るよ
うになつた。

「帰れ!! い、犬に用はない!!」

見つけると、龍が遠くから怒鳴つた。

「俺たち、放つといてくれ!! そんなに、どうして
貴様っ、し、しつっこいのだ!! 帰れ!! ……」

と、棒を振りあげる龍の肩は波うち、腐つた肺か
ら臭い呼吸を吐いた。

半年もしないうちに、龍の仲間たちが次々と欠け
ていった。転向した彼らは、ある者は町の工場へ、
ある者は高原を捨てて故郷へ帰つていった。そして
最後に乳のみごを残して赤い顔の女が姿を消した。

すると龍は、その日から赤ん坊を細い紐で背負い
あき伍に山羊の乳を貰つて歩いた。夕方、赤ん坊が
餓えて泣くと、龍はランプも灯さず柱にもたれ、膝
をかかえ、顔を伏せて、いつまでも屈みこんでいた。
その頃から龍の寝こむ日が多くなつた。火山灰の
山畑は、掘りおこされたまま、再び、雑草が根をは
つていた。

冷たい秋風が立ち枯れた唐モロコシをサワサワと
ゆさぶり、夜の空をひき裂いて百舌が甲高く鳴いて
飛んだ。

永い夜を龍の肺は咳こみ、熱っぽい体が夜をと
おして寒い汗を流した。そして、その頃の龍には、も
うたった一人の同志も、たった一軒の隣人すらもな
くなくなつていた。

だが、こそこそと茶島巡査だけが見舞つた。

「う、うる、さい!! 帰れ……………」

苦しうに龍が怒鳴り、血のまざつたつばを土間
へはくと、駐在が新聞に包んだうどんの束をそつと
置いて逃げた。そして龍は頑固な柴犬のように、幾

日もそれを食おうとはしなかった。

開拓地の龍の小屋の軒下に、羽抜けした鶏が一羽露にぬれながら寒そうに立っていた。戸を開けるとうす暗い土間から、生臭くしめったとろけた肺が匂った。

「龍、私だ、しっかりしてろよ」

声をかけると、龍が何か喋ったようだった。

彼はうすい布団にねていた。すっかり肉のそげた顔が深い隈をつくり、まだ乾かない血がくぼんだ頬に小さくたまっていた。

かたわらのわらの荒ムシロの上に、赤ん坊がぼろきれのように眠り、その口や鼻を蠅が何匹もたかってなめていた。

枕元に坐ると、龍の目が開いたまま、私を見ていた。うるんだ大きな目であった。

「何にも喋らなくていい、胸にひびくとわるい、なあにこのぐらいい、死にアしないぞ、いま待ってるよ、いますぐに、楽にしてやるぞォ」

目を閉じて、聴診器できくと、肺が右も左も、も

うはらわたのように腐っていた。

だが私は何べんも云った。

「大丈夫。大丈夫。これっぽっち、私だって、すぐなおしてやるぞ、すぐにな」

何本も、私は注射を打った。そして龍は細い腕を私にあずけたまま、うすい胸で苦しい呼吸をつづけていた。あと数十分の間の、残されたそのわずかな呼吸を

「こんなに真暗に閉めきって、駄目だぞ」

私が雨戸をあけると、新たな空気が露になって龍の床へ流れこんでいた。

「永い雨だ、でも、もうじき夏だな、麦があんなにのびた」

遠い緑の平野を指すと、龍の顔が静かに向きを変え力のない目で乳色に煙った高原を見た。そのときふと、龍の唇が声にならない声で微かに唄いだしたのだ。

(独語の唄略)

唄いながら……龍は死んだ。

以下次号

言万休観音奉納者芳名

川練	馬	所	所	所	大	所	所	所	所	所	所	住所				
越	馬	所	所	所	所	所	所	所	所	所	所	氏名				
松山千恵子	琴坂雄平	我野進	我野いゑ	粕谷常夫	植竹熊蔵	山田義雄	小島民治	山田まん	田中幸雄	粕谷昭三郎	近藤つる	田代兵勇	野口八太郎	北田弥之作	神山いと	北田直
東松山	所沢	狭山	所沢	所沢	所沢	所沢	所沢	所沢	所沢	所沢	所沢	所沢	所沢	所沢	所沢	所沢
外山口	鈴木政雄	小沢栄次郎	秋和貞蔵	粕谷永吉	関口政雄	石井三平	田代梧郎	外四体	外スイ	外五十体	野村喜好	田原貞雄	岡田ヤス	本橋とめ	小宮重四郎	氏名
新潟県	福岡県	川崎	練馬	宮城県	日本橋	名栗	台東	武蔵野	杉並	中野	新宿	川口	秩父	入間	吉沢	住所
宮沢幸	梅林	三橋	船尾	今野	中島	柳	喜美子	長谷川	佐々木	武山	田辺	福原	小林	吉沢	氏名	
幸弘	恭子	恭子	滋子	近治	柳晴	肇	はるみ	秀道	さわ	い	信代	英雄	勇			

浦和	秩父	鎌倉	練馬区	大田区	住所
小林セツ子	芳枝	三森	田中	宮沢	氏名
鶴ヶ島	小川野	宗助	栗	幸品川	住所
成瀬	井上	鶴ヶ島	中野好太郎	山田	氏名
義男	健二	豊島	綾子	綾子	住所
累計	第十四集計	豊島	内山	幸一	氏名
八二八六	一二三				

大灯笼寄進者芳名 敬称略

(壹基一金拾万円也)

参基	壹基	壹基	壹基	壹基	壹基	壹基	貳基
与野市	川口市	所沢市	所沢市	所沢市	所沢市	萩原	野村
梶谷	大野	大館	小高	岡田	平岡	喜代志	喜好
累計	元美	正三郎	太助	喜作	喜代志	一男	
貳拾基	トヨベツト						

鳥居観音だより

夏の行事と来山状況

六月二日、大宮市北田様外十三名来山。

六月三日、春日部田村様、川崎の宮田様、日本橋の神山様等、写経、老万體観音御申込のため来山。

六月四日、バス三台を始めマイクロにて来山者多く、山内にぎわう。

六月七日、八王子婦人会五〇名来山、外多数参拝

六月十一日、保谷市、田代様、瑞穂町、鈴木様、流灯法要参拝の予約に来山。

六月十四日、静岡、都野井様、中野、田辺様より写経折本届く。

六月十五日、所沢市小山様經由老万體観音十一体を始め、写経五〇巻、野村喜好様大灯籠二基奉納の申込受付

若林とく様より写経四〇巻届く。

六月十七日、所沢小山様經由、平岡喜代志様より大灯籠一基奉納申込あり。

六月十八日、所沢小山様經由、老万體観音五十体の申込あり。

六月十九日、所沢小山様經由、塔婆供養十三本の申込あり。

六月二十日、所沢小山様經由、萩原一男様より大灯籠一基奉納の申込届く。

六月二十四日、久し振りの晴天にて、来山者多し。

六月二十五日、埼玉トヨペット関係の塔婆供養の申込二三七本受付、来山及写経の申込多数あり。

流灯申込書及依頼書発送。

六月二十九日、松田江畔先生より写経百巻届く。新妻治郎様其他より写経五十五巻申込受付。

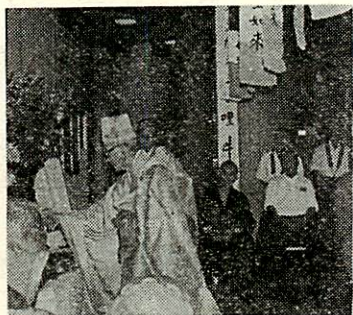
六月三十日、堀沢様来山、若林様塔婆五本申込。

七月一日、梅雨晴のよい天気来山多し。

七月二日、平沼先生来山、主任会議十三時開催各部門にわたって、研究話し合い四時終了

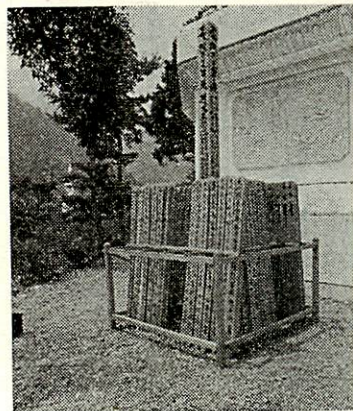
六月七日、千葉寿様外参拝多し。

七月十六日、第一回塔婆供養会午後二時より大観



そして供

養された塔婆は、堂宇右の前庭の見晴らしのよい所に、供養柱と共に納められた。



音堂宇内にて、開祖平沼先生臨場、導師小林、有馬、鯨井三師により執行、村内梅花流会員二十名によって御詠歌奉詠、関係来賓参列のもと三百余霊の塔婆施俄鬼供養が執行された

八月十六日、午後五時より本堂にて、第十五回

流灯法要を執行、午後七時から名栗川に千二百余灯の流灯に次いで数百発の打上げ花火、この観覧者達によって盆踊り大会もあって盛大だった。



とりひ 第二十七号 発行日 昭和四十八年十月一日
編集兼 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 岡部 千三
発行人 浦和市仲町二一八十五 武州印刷株式会社
印刷所
発行所 鳥居観音電話〇四二九七〇四、名栗二七五番

白雲山

鳥居観音
観世者センター案内図



納経塔落慶と心経一万巻納経式

- 11月1日 10時30分納経塔現地
折から山内の紅葉は盛りとなって、空と山の緑に和して、
その中に輝く納経塔の美観は格別です

秋 季 例 大 祭

- 11月17日
 - 本 堂 10時30分
 - 玄装三蔵塔 11時
 - 大 観 音 11時30分
- 以上二つの行事については、ご名々にご案内申し上げべき
ですが、本紙をもちまして、ご案内にかえさせていただきます。

新年祈禱のお申し込みのお願い

- 元旦から三日まで、10時新年祈禱会執行
- 願意、家内安全、交通安全、諸願成就、安産、商売繁昌、
其他
- 祈禱料 千円、弐千円以上
- お申し込 12月末日まで受付
- お申し込先 埼玉県入間郡名栗村鳥居観音寺務局
- 払込 埼玉銀行名栗支店鳥居観音50079口座